

グローバル時代の日本語教育-つながる教育、社会、人、モノ、情報
 JAPANESE LANGUAGE EDUCATION IN THE GLOBAL AGE: CONNECTION IN
 EDUCATION, SOCIETY, PEOPLE, THINGS, AND INFORMATION

當作靖彦、カリフォルニア大学サンディエゴ校

Y.-H. Tohsaku, University of California, San Diego

1. 教育を取り巻く状況

「教育とは未来の生活の準備ではなく、現実の生活そのものである」と言ったのは教育学者の**John Dewey**ですが、教育の役割とは、その時代を生産的、効果的に生きることができる人間を作ることです。これは日本語教育も例外ではありません。

今私たちは**21世紀**に生きていますが、テクノロジー、インターネットの急速な発達により私たちが生きている**21世紀**の世界は、**20世紀**と比べると大きく変化し、私たちの生活も大きく変化しています。このような**21世紀**の社会をグローバル化が進行した時代だとよく言います。グローバル化が具体的にどのようなものを指すかは人によって異なるでしょうが、時代が大きく変わってきて、そして、その変化が今後も続くことは確かです。ニューヨークタイムズのコラムニストの**Thomas Friedman (2005)**はグローバル化の結果、世界が縮小化したと言っています。インターネットの発達により、新しい情報が生まれるとすぐに世界中に広がり、同じ情報を世界中の人々が共有できる現在の世界は縮小化したと言っているでしょう。また、**Friedman**はグローバル化の結果、世界は等質化したと言っています。確かに同じ情報を瞬時に共有できるようになり、世界中の人が同じ情報をもとに行動できるようになった点では、等質化が進んだと言えます。しかし、情報は共有されても、その解釈は人や文化によって違うための、多くの情報が共有された結果、逆に多様化も進んだと言えます。

ある研究によると、**2013年**の世界のテクノロジー企業のテクノロジーの発展のスピードがそのまま続けば、**21世紀**全体で**2013年**の**2万年**分のテクノロジーの発展が起こるということです。テクノロジーの発達が加速化し、今の時代では不可能と思われていたことも可能になってしまう時代となりました。今世紀の終わりまでにはクローンベイビーが作られ、ロボットが自分の会社の企画書を書き、社長になる時代が来ると言われていますし、無人自動車の発明により、車を運転することが法律違反になる時代が来ると予想されています。また、ドローンの発達により配達系の仕事はなくなると予想されています。ロボット、コンピュータが人間の仕事をできるようになり、**Google**の**Larry Page**は**2050年**までには人間のしている仕事の**80%**はコンピュータ、ロボットによってなされるようになると予測しています。ごく平均的な能力しか持たない人間はその仕事をコンピュータ、ロボットに奪われる時代がやってきました。航空管制官や旅客機のパイロットの仕事もコンピュータがするようになると予測されており、平均以上の能力、スキルを持っていても仕事が保持できない時代がやってきそうです。このような動き

の中で、経済活動もどんどん複雑になり、単純作業の仕事は労賃の安いところへどんどん移っていき、先進国では、産業の空洞化が深刻になり、職を失う人が増え、安定した仕事につくのが難しくなる一方です。アメリカの労働省の統計調査によると、20世紀アメリカ人は一生で1つか2つの仕事しかしなかったそうですが、今は18歳から38歳の20年間で平均10個から15個の仕事をする時代だそうです。いわゆる平均層、中間層がなくなり、貧富の差が激しくなってきました。20世紀には平均層のアメリカ人でもある程度努力すると、それに見合っただけ生活水準が上がり、定年まで真面目に働けば、楽な年金生活が待っていました。しかし、21世紀は努力しても必ずしも成功するとは限らず、むしろ失敗することのほうが多い時代となってきました。21世紀は明らかに20世紀よりも生きるのが大変な時代となり、教育はそのような大変な時代を生き抜くことができる人間を作り出すこと、大変な時代を生き抜くための知識、能力、資質を持った人間を生み出すことを要求されています。

グローバル化のもう1つの特徴は人間が作り出す情報量が想像を絶するほど増加していることです。ある研究によると、人間の歴史が始まってから2003年までに作り出した情報量は、500億ギガバイトだそうです。現在世界中の人間はこの量の情報を1分に一回の割合で生み出しているそうです。今日我々が生み出す情報量はこれまで人間が作り出してきた情報の50%になるという別の分析もあります。それほど情報量が増え続けているということです。情報量が増えている一つの理由はTwitter, Facebook, Instagramなどのソーシャルネットワーキングサービスの隆盛により、個人が簡単に情報を発信できるようになったからです。Youtubeには世界中から一分間で120時間分のビデオ画像がアップロードされています。Youtuberというこれまでになかった職業が生まれ、世界中で一番お金を儲けているYoutuberは年間15億円の収入があると言われています。情報を発信することに大きな意味が出てきた証拠と言えます。人間が作り出している情報の75%は政府や公共機関、大学などが生み出したものではなく、個人が生み出したものと言われています。発信力を持った個人は大きな力を持つようになり、Facebookからエジプトで革命が起こる時代になったのも、個人の発信力の力を示しています。TwitterやYoutubeは出来てから10年ちょっとしかたっていませんが、正式のコミュニケーションのツールとして認められ、政治家が声明をTwitterで出したり、テロリストが身代金をYoutubeを通して要求するなど公式の情報発信ツールとして認められています。このようなソーシャルネットワーキングサービスのおかげで、知らない人、これまでつながることができなかった人と簡単につながれるようになり、そのつながりが大きな力を生んでいく時代となりました。21世紀のキーワードは「つながる」であるとよく言われますが、それはこのようなインターネット、ソーシャルネットワーキングサービスの発信力によるところが大きいと言えます。

2. 新しい言語教育のアプローチ

ソーシャルネットワーキングサービスの発達で人間が作り出す情報量を増やすとともに、上述のように人間のコミュニケーションの意義も様式も変えることに

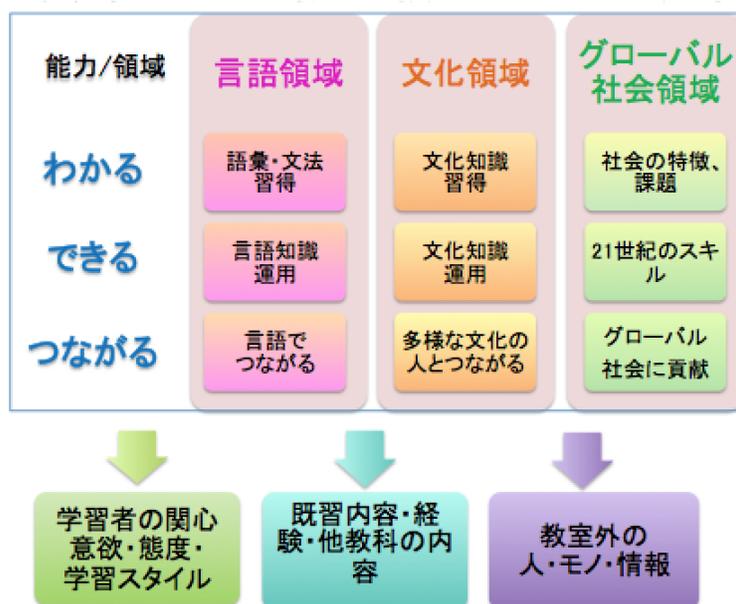
なります。言語使用により、「情報伝達、情報獲得だけでなく、つながりを作る」、「コミュニティーに参画し、社会活動をする」、「社会に貢献し、社会を改善したり、生活をよりよいものにしたたりする」目的がさらに明確になってきたと言えます。この言語使用の意義、様式の変化に伴い、言語教育も新しいアプローチが望まれるようになりました。具体的には、言語教育により、「つながりを作り、多言語・多文化のグローバル社会づくりに参画する力」、「山積する人類共通の問題を解決する対話力・社会力」、「複雑化する社会を生き延びる力」を開発、発展させるアプローチが必要となってきました。筆者は2013年に出版した「NIPPON3.0の処方箋」の中で、ソーシャルネットワークワーキングアプローチ（以下、SNA）という21世紀のグローバル社会での必要性を反映した新しい言語教育のアプローチを提唱しました。

このアプローチは、2012年に国際文化フォーラムが発表した「外国語学習のめやす（以下、「めやす」）」で提案されたアプローチを拡大、発展させたものです。「めやす」は日本の高校レベルの中国語、韓国語教育の指針と学習要領を示したのですが、言語学習全般に適用できるもので、小学校から大学まで、外国語としての言語教育だけでなく、第二言語としての外国語教育、定住者の言語教育、継承言語教育にも広く適用できるものです。

このアプローチでは、言語教育の理念を「他者の発見、自己の発見、つながりの実現」と規定し、教育目標を「ことばと文化を学ぶことを通して、学習者の人間成長を促し、21世紀に生きる力を育てる」と規定しています。これまでの言語教育のアプローチが言語をより効果的に教えること、学ぶことを目標としていた、いわゆる教育モデル、あるいは学習モデルであったのに対し、SNAは言語教育により人間を育てる、いわゆる「人間形成モデル」であることがその特徴と言えます。

SNAの教育実践の基本になるのが、その学習目標、すなわち、総合的コミュニケーション能力の開発です。SNAではこの能力は3x3+3という概念で示されます。SNAではコミュニケーション能力を3つの能力（わかる、できる、つながる）、3つの領域（言語、文化、グローバル社会）、そして、3つの連携分野（学習者の関心・意欲・学習スタイル、既習知識・経験・他教科の内容、教室外の人・モノ・情報）により規定しています。SNAでは総合的コミュニケーション能力は次の図に示されるような12の領域からなり、学習活動を通して、この領域を調和よく達成しようというものです。

図1 SNAの総合コミュニケーション能力



「わかる」、「できる」、「つながる」の3つの能力に関して言うならば、これまでの言語学習アプローチでも、「わかる」と「できる」を目標としていましたが、SNAではこれに新たに「つながる」が加わりました。これは、人間は社会的動物であり、コミュニティーを作り、それに参加し、つながりを作ろうという基本的な欲求も持っていて、言語を使うことによって、その欲求を満たそうとしていることを反映しています。Richard Miller (2005)は人文科学の目的は異なる世界の間をバランスを取りながら動き、意義あるつながりを作ることであると言っています。人文科学の一分野である言語教育の究極的目標はつながりを作ることだと思います。人文科学の目標は異なる文脈で得たものをつなげる能力を発展させることであり、言語教育の価値もそのつながりを作る能力発達に貢献できることですし、つながる能力開発が言語教育のエッセンスであると思います。SNAでは、「つながる」は+3の3つの連携領域にも関わる概念ですし、「つながる」は他人とつながるだけでなく、学習者が自分自身とも「つながり」、自己を内省し、自己を確立していくこととも関わっていると思います。また、学習とは脳の中で既習知識、能力、経験と新しい知識、能力、経験を結びつけていく過程であり、脳の中でも「つながる」ことは重要な意味を持っていると思います。

SNAの総合的コミュニケーション能力で注目すべきは、「グローバル社会領域」です。「言語」と「文化」はこれまでの言語教育のアプローチでも扱われていましたが、「グローバル社会領域」は言語を使い、社会で生きるために必要な知識、能力、資質を扱う領域で、SNAの特徴と言えます。上述のように人間は社会的動物ですが、生きるためには社会力が必要です。言語活動を円滑、効果的に行うためには、その能力は必須であり、言語教育でもそれを発展させるようにすべきだというのがSNAの考えです。「グローバル社会領域」の「わかる」は、今自分が生きている社会がどのようなものかを理解し、そこで解決すべき問題は

何かを知る能力です。また、この社会を生きるためにどのような知識、能力、資質を伸ばさないといけないかの知識も含まれます。「グローバル社会領域」の「できる」は21世紀生きるために必要なスキルを開発し、使う能力です。前章で述べたように、21世紀は20世紀と比べて、いろいろ複雑な問題が起こり、生きるのが難しい時代です。21世紀は生き抜くためには20世紀以上に様々な能力が高度のレベルで必要となります。現在世界中で教育改革が進行中ですが、この教育改革の中で、教育の最大目標が、この21世紀を生き抜くための能力を身に付けることになっています。例えば、2015年のダボス経済会議で教育者が集まった際に、現在の教育では次の16の能力、資質を身に付けることが教育の目標であることが話し合われました。(World Economic Forum (2015))

21世紀の教育が賦与すべき重要な16のスキル

●リテラシー

1. 読み書き能力
2. 計算能力
3. 科学のリテラシー
4. ICTのリテラシー
5. 経済・金融のリテラシー
6. 文化・社会的リテラシー

●複雑な問題を解決する能力

1. 高度の思考能力・問題解決能力
2. 創造性
3. コミュニケーション能力
4. 協働力

●性格・資質

1. 好奇心
2. 率先力・起業家精神
3. 忍耐力
4. 適応力
5. リーダーシップ能力
6. 文化的・社会的意識

これらの21世紀生きるために必要な能力をそれぞれの教科の内容を媒体にして開発させることが教育の目標になっていることをSNAは反映していると言えます。

SNAでは3x3に加えて、3つの連携領域があります。能力開発の際に、「学習者の学習スタイル、関心、態度、意欲」や「既習知識、経験、他の教科の内容」と結びつけることを目標とするともに、「クラス外の人、モノ、情報」とつなげ

ようというものです。この+3は3x3の能力目標と異なり、言語教育の行動目標と言ってよいでしょう。

3. SNA の実践

これまでの言語学習アプローチと異なり、SNAにこの教授法を使いましょうとか、このテクニックを使いましょうという指示はありません。メソッドではなく、あくまでもアプローチを示したものです。それぞれ異なる環境で教える教師が、3x3+3をその環境で一番効果的に達成できる方法を自分で考えて、実践することを奨めています。それだけに、SNAでは教師の教育環境、カリキュラム、教育活動のデザイン力が重要となります。

現在、言語教育の分野ではいろいろな教授アプローチが提案されています。例えば、

Project-Based Learning (PBL)
 Problem-Solving Learning (PSL)
 Passion-Based Learning
 Thematic Approach
 Inquiry-Based Learning
 Content-Based Instruction (CBI)
 Content and Language Integrated Learning (CLIL)
 Process-Based Learning
 Case-Based Learning
 Literacy-Based Instruction

などがあります。

また、次のような方法が使われるようになってきました。教師自身がどのようにカリキュラムを作ったら、3x3+3が調和を持って達成されるかを考えて、レッスンをデザインする必要があります。

ゲーミフィケーション
 反転授業
 ハイブリッド授業
 ブレンディド授業
 メーカーズ教育
 Disruptive Education
 ジーニアス・アワーズ

4. 最後に

上述のようにロボット、コンピュータが人間の仕事を人間以上にうまくするようになり、人間の仕事を奪ってしまう時代となり、言語教師もなくなる職業になるのではないかと予測する人もいます。しかし、ロボットやコンピュータではで

きないこともあります。人間しかできないことはまだまだあります。これからの言語教師はその部分に特化すれば、仕事をロボット、コンピュータに奪われることもないと思います。その部分とは、言語を使って、人と人がつながること、言語を使って21世紀の世界が抱える山積した問題を解決すること、社会に貢献し、社会を改善することだと思います。SNAは「つながる言語教育」、「問題解決の言語教育」、「社会貢献の言語教育」を目指したものです。SNAを実践していくことは学習者にとっても教師にとっても重要なことと言えるでしょう。

参考文献

- 国際文化フォーラム (2012) 『外国語学習のめやすー高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』 (當作靖彦・中野佳代子監修) 東京: 国際文化フォーラム.
- 當作靖彦 (2013) 『NIPPON 3.0 の処方箋』 東京: 講談社
- Friedman, Thomas. (2005). The World Is Flat: A Brief History of the Twenty-First Century. New York: Farrar, Straus and Giroux
- Miller, Richard. (2005). Writing at the End of the World. Pittsburgh: Pittsburgh University Press
- World Economic Forum. (2015). New Vision for Education. Geneva, Switzerland: World Economic Forum